



無限のささやきのなかで

Ver.0

なぎ@まにふいくみやはか

もくじ

あとがき

1

無限のささやきのなかで

2

あとがき

なぎ@まにふいくみやはかと申します。

これはひどい。でもどうしても新刊を出さねばいけないの
でこんな状態で発刊することにしました。本を手にとっし
また人に土下座したいです。それもフライング土下座を。
本当にしたいと思っているので土下座させたい方はお気軽に
申し出てください。

話の設定とオチだけ考えたら見事にその部分しか書けませ
んでした。自分の実力不足とか原因はたくさんありますが、
主に私の怠慢が原因です。

話としてはtwitterが大きくなりアルタイム性が増したらど
うなるかという妄想が元になっていてます。が、しかし私自身
はtwitterをぜんぜん楽しめていません。あんまりフォロー
していないので楽しさが分かる段階にまで達していないので
しょう。

<http://twitter.com/nagitsuki/>

フォローのほどよろしくお願いいいたします。

次回イベント参加はコミックワールド山梨7/6(5月11
日アイメッセ山梨)に参加する予定です。はじめての地元の
イベントで少しの期待と知り合いに会うかもしれないという
恐怖を感じております。

とりあえずこの本を完成度を上げる方向でがんばります。
主に中間部と表紙をどうにかする予定。
次々回の参加予定イベントは『杜の奇跡12』(仙台)で
す。

アウトプットしながら成長していきたいと思いますのでよ
ろしくお願いいいたします。

(未開封のL4Uやりたいなあ)

無限のささやきの中

なぎ@まにふいくみやはか

Yシャツをスラックスに着替えて身支度は完了。

じゅん『着替え完了。何でコミュニケーションのスタイルは変わつても、正装ってのは変わらないんだろう（以下略』

1

朝起きた瞬間に、タイムラインの確認は忘れない。

じゅん『いま、おきた。今日も会社だよ……』

条件反射的に簡単なメッセージを投稿して布団から出た。

立ち上がり、寝ぼけた頭のまま、洗面所に向かう。その間に、現実（リアル）での友達や同僚、ネット上だけの関係の『フォロワー』たちのタイムラインをざっと眺める。俺の意識レベルを読み取った携帯がガンガン響かない程度の感じで

じゅん『みだいだね』

タイムラインを伝えてくる。深夜アニメのネタバレを書くやつだけはイライラするが、それ以外は大事件も起きてないみたいだ。

じゅん『みだいだね』

同じ番組を見ている、人との他愛のない『会話』をしつつ、食事は終了。時刻は7時30分。そろそろ会社に行かないといけない。

じゅん『みだいだね』

タイムラインの中からトピックになりそうな言葉はクリップして、ネタを集めておくようにメインマシンのクローラーに投げておく。簡単なダイレクトメッセージにはほぼ無意識のうちに返信する。そのうちに、現実の俺は顔を洗いひげを剃る。

じゅん『通勤組なのでそろそろ出かける』

2

外は今日も晴天で俺の住んでいる街は東京のベットタウンなのだが、以前よりも通勤の時間帯に見かける人が少なくなっている。というのも、『携帯』を使ったコミュニケーションにより、面と面を合わせなくとも意識をあわせることが出来るようになったからである。

『携帯』、このデバイスはもちろん昔の携帯電話とは似て非なるデバイスである。携帯電話の基本機能である通話・メールといった基本の携帯電話の機能に加えて、十年ほどまえに実用化された人間の思考を自然言語レベルで認識する機能により、伝達手段という機能を超えて様々な機能を持つようになった。

思考認識技術の開発には二つのブレイクスルーがあった。

一つ目は、思考認識方法の発見と、ASIC化による小型化だ、一定の練習が必要ではあるが、思考のコンピュータによる認識が可能になった。

二つ目は、自然言語処理のハードウェア化だ。自然言語処理の大部分をASICにより処理できるようになり、大幅な処理の高速化と低消費電力化を実現した。また、コーパスを大量に保持する大容量の記憶装置により思考の大部分の認識

が可能になった。

思考認識が可能になったことで、今まで意識的に行われてきた、意思伝達の一部を無意識的に行うことが可能になった。

つまり、自分の現在の心境を即座に投稿し、それがサーバ上に蓄積され、相手は自分の見たいタイミングにそれを確認する。これにより、押し付けがましくなく現在の状態や心境を伝えることが出来るようになった。逆に情報をえる立場からすると、相手が今何をしていて、どんな気持ちなのか『理解』できるということである。相手の気持ちを理解するということは心理的な距離を近くし、円滑な人間関係を作り出すことに成功した。

職場においても、離れた事業所で仕事はもちろんのこと、同じ職場で働く人安心感を得ることが可能になった。もちろん自分の気持ちと違うことを問う個としている可能性もあるが。

状態を確認できる、他人が何を考えているかわかるそのことがつながり感を演出して、現実でのつながりが減ってきている。

人と人との職場や学校そんなそいつた状態が作れるよう

になつてゐる。あつていなくてもあつてゐるようなコミュニケーションができあがつてゐる。

とはいっても実際に俺は出勤しているわけで、出勤が必要な仕事というのは絶対的に残つてゐる。製造・運輸といったマンパワーが必要な仕事、一部の対面販売業、あとは情報の流出を極度に恐れる仕事。まあ俺の仕事は金融関係のシステム開発で、客先音サイトで、開発に使う端末も貸与されたものにつかって、当然自由にインターネットにアクセスできる環境ではない。

『携帯』も職場に入るときにロッカーに預けなくてはならない。當時のコミュニケーションが当たり前になつたこの世の中では働いている間だけでも携帯を預けるなんてありえないという人もいるが、俺は仕事に入るというメリハリがついて気に入っている。

昔よりよりもすいている通勤電車にのつて、職場へ向かう。

電車の中では、朝クローラーに収集を依頼したデータと、RSSリーダーのデータを斜め読みする。無線ブロードバンドが一般化しても、デバイスの処理性能としては大規模なマシンに劣る。俺が大規模な学習データの残るメインマシンに『愛情』を感じているだけなのかもしないが。

会社に『携帯』がないからといって前時代的なインターネットを利用しているわけではない。会社としても思考認識の有用性は理解しているが、情報流出の可能性があるから個人での『携帯』の持込を禁止しているだけだ。会社に入れば会社から貸与されるコミュニケーションデータを使って仕事をすることになる。

就業時間が過ぎて仕事の時間が終わつた。思考認識による入力方法の変化と意思伝達の高速化で昔よりも残業をする人は少なくなつたらしい。まあ、俺にとっては定時に仕事を切り上げるのはいつもの日常なんだけど。

会社を出るときにコミュニケーションデータと引き換えに自分の『携帯』を受け取る。

じゅん『仕事終わったよ』

身に着けてすぐに仕事が終わつたことを投稿しつつ、タイムラインをチェック。就業時間中のタイムラインをチェックしていると、仕事中も自分の『携帯』を使えたらと思うが、まあ仕方がない。次にダイレクトメッセージをチェックする

と雑談の返信に混じって一件のメッセージが、目に留まった。
さき『また、フォローさせてもらつてもいいですか？』

『さき』、この名前を見たとき俺は戦慄を覚えた。『さき』

とは俺の前の彼女篠山咲のハンドルだったからだ。咲は付き合い始めのことは普通の女の子だった。ところが付き合いを深めるにつれて、嫉妬深くなり、女性のフォロワーをすべて削除するよう命じたり、押しかけてくるようになった。

そして忘れもしないある夜ダイレクトメッセージで『一緒に死のう』というメッセージを俺に送信して、アパートまで押し掛けてきたのだ。タイムラインをチェックした俺はすぐ警察に連絡し、咲は玄関の前で逮捕された。

その後精神病院に入院しているという話は聞いていたが、退院していたとは知らなかった。

じゅん『退院してたんですね。フォローしてもらうのは別にかまわないですよ』

軽い気持ちでダイレクトメッセージに返信する。咲のタイムラインを監視しておけば前のようにおかしな行動を未然に

防げるかもしれないからだ。

数ヶ月が過ぎた。その後、咲は何の行動も起こさなかつた。タイムラインに書かれている日記も普通の日記だし、一度街で偶然であつたときもおかしなそぶりはなかつた。

4

ガンガンガン。

夢の中で大きな音が聞こえた気がした。眠りから覚めるふと『携帯』に時刻を問い合わせると三時だった。ガンガン。扉を強く叩く音だ。この音で目が覚めたんだ。

誰だこんな夜更けに。非常識だし近所迷惑だ。『携帯』に部屋の明かりをつける様に命じる。電気が付かない。もう一度命じてみるが、やはり付かない。メインマシンのハングアップの可能性を考え、『携帯』からメインマシンにP I N Gを発信する。応答がない。こんな時にハングアップかよ。

仕方がないので起き上がり、壁づたいにおぼろげに覚えている電気のスイッチを探す。スイッチで電気をつけるなんてこの部屋に引っ越してきてからほとんどしたことがないので

場所が分からぬ。ドアの左右どちらかにあるはずだ。やつとのことでスイッチを探し出しオンにするが、電気がつかない。何かがおかしい。もしかして停電だらうか。

もしかしたら俺の部屋だけの停電の可能性もある。そうなると怪しいのは今ドアを叩いているやつが原因の可能性が高い。

タイムラインをチェックしてみる。

まさあき『牛丼は吉野家』

もといち『ねもい』

パングー『ねます』

見たところおかしなメッセージはない。ダイレクトメッセージをチェックするがここにもおかしなメッセージはない。

この状況で一番怪しいのはアイツなのだが、たった

さき『お風呂に入っています』

どうやら何より近所迷惑なので壁づたいに歩いてドアス

コープからうっすらと光の漏れる玄関のに向かう。玄関をドアゆっくりとあけた。

「こんばんは、洵」

扉を開けてみると、そこにはアイツがかつての彼女だった

篠山咲が立っていた。俺は理解できなかつた。たつた今チェックしたはずのタイムラインで咲は風呂に入っていると書いていた。その咲がなぜここにたつているのか。

「ふふ、驚いたでしょ」

俺の気持ちを読んだかの用に咲が話す。

「な、なんでここにお前がいるんだ。」

け』

『携帯』のコミュニケーションは現実ではない。本当のことを書くのも嘘を書くのも人の自由だ。だが、思考認識のインターフェースにより、様々な行動が投稿されるようになり、俺は人の行動をすべて把握した気になつていてた。

「あの時は失敗しちゃつたからね。今度はしっかり準備したよ」

咲が続ける。

『携帯ではできるだけツツウのことを書くようにしたし、旬と会った時だってツツウだったでしょ』

『あれも演技だったのか。俺を騙したのか』

『騙した? 悪いことをしたわけじゃないのよ。永遠になるために必要だったから。死んで』

おもむろに取り出された包丁が何度も腹に突き刺さる。刺さるたびに反射的にうめき声をあげてしまう。致命傷のはずなのに不思議と痛みは感じない。痛いというよりもただ腹が熱いのである。腹の熱さからうずくまってしまう。ふと腹を見てみると血がみずたまりみたいに広がっている。こりゃあ死ぬなど客観的に理解しつつ、掃除する人は大変だらうなと思ってなぜか笑ってしまう。

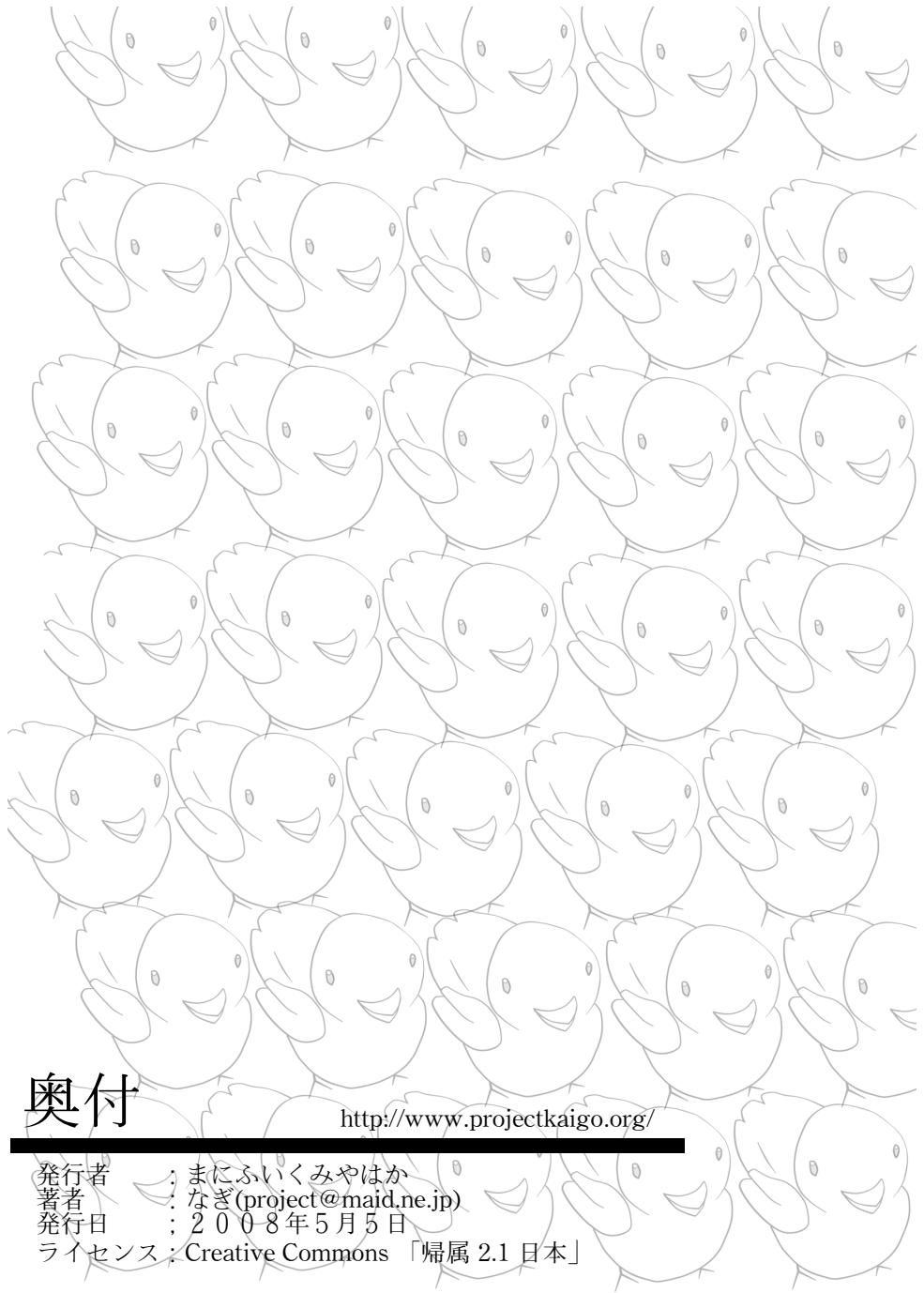
殺されることに恨みはなかった。恨んだって恨まなくたつて死んでしまうのだから。俺は咲に殺される運命なのだと悟った。でも、残したかった俺が生きてきたのだという証を。熱い、ぼうっとする頭の中で考えて考えて考えた。文字、声そんなんもんじゃ残らない。俺は死ぬまで生きてきた証を残したいのだ。ふと理解した。そして、俺は『携帯』に命じた。

じゅん『俺はまだ生きていた。そして死ぬ』

コンピュータが永遠に証を残し続ける。俺のオリジナルは消えても。データはコピーを繰り返されていくだろう。そして俺が生きた証を残すのだ。

俺が書き込んだメッセージはその後もサーバに保存され続

け、殺人被害者が残したメッセージとして伝説となるのだが、それは俺の知ったところではない。



奥付

<http://www.projectkaigo.org/>

発行者

: まにふ、いくみやはか

著者

: なぎ(project@maid.ne.jp)

発行日

: 2008年5月5日

ライセンス

: Creative Commons 「帰属 2.1 日本」